
ミドル恋愛

アラタユズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミドル恋愛

【Nコード】

N4181N

【作者名】

アラタユズ

【あらすじ】

貞木夏子の毎日の日課は幼なじみ八田蒼の世話焼き。夢は画家。好きな人は……。ちゃんと夢と恋愛をしている女子高生だ。

そんな夏子はド田舎でも幸せな日々を送っていた。

青春そして恋愛。色々な壁にぶつかりながら画家を目指す夏子の夢と恋愛は？

+ 1 毎日の日課（前書き）

アラタユズです。初投稿ですがよろしくお願いします

Middle^{ミドル} 中央、中間

+ 1 毎日の日課

友達は「こんなド田舎に産まれて最悪」とつぶやいていた。

服を買いに行くのにも、食料を買いに行くのにも山を越えなければならぬ。

それが嫌だと毎日ように毒を吐いていた。

そんな友達の言葉を毎日のように聞き流していた。

代わりに、貞木^{さだき なつこ}夏子の視線は常に机に突っ伏している八田^{はった あお}蒼に向けられていた。

「夏子……聞いてる？」

「聞いてる聞いてる」

「嘘ばっか！あんた蒼くんのこと見てるじゃん」

「だって……！蒼ってわたしが目を離すと何かしら

」

ぐだぐだと蒼がどれほど心配させる奴なのかを夏子は日課のように語る。

それが夏子にとっての日課だった。

ただ、平和で平凡な楽しい毎日。

夏休み前の高校3年生にとっては非常にゆったりとした雰囲気だった。

+ 2 幼なじみ（前書き）

後ろ乗ってく？

+ 2 幼なじみ

幼なじみは昔から目の離せない奴だった。
気づけばいつも夏子の後ろにくっついて、片時も離れない。

「蒼。起きて。帰ろう?」

机に突っ伏して寝ている蒼を揺さぶる。
すると、むくりと起きあがった蒼はまだ開かない目をこすりながら目の前にいる夏子を見つめた。

「もう放課後?」

「バカ。3年は午前授業。だから帰ろうよ」

「うん」

癖毛でなのか寝癖でなのか自前の天然パーマからなのか。
爆発的になったボザボザの頭を触る夏子の手をどけて蒼は席から立ち上がる。

日光であか抜けた少し茶色い頭髮がユラユラと揺れる。

「……俺の髪好きだよね」

「うん。なんかあったかい」

「今夏だよ?」 あったかい”は冬に言うてよ”

「分かった」

他愛のない会話をして一緒に誰もいない教室を出る。
蒸されるような暑さが夏子と蒼を包んだ。

「あついー」

「アイス買いたい」

「じゃあ行くか！」

「やった」

子供のように笑った蒼を見てつられて微笑む。

蒼には少しばかり大きい、だらしなく出ているシャツの裾を二本の指でぎゅっと握る。

「……どうしたの」

「なんでもないよ。それより、アイスアイスー」

「夏、」

蒼に呼ばれた。

夏子は、蒼に付けられた一文字省いたアダ名は少しばかり気に入っている。

「なに？」

「後ろ乗ってく？」

靴箱を出ると、ちらほらと下校する生徒と部活にはげむ生徒がいた。その場に混じって蒼は自転車置き場を指さした。

「当たり前じゃん」

嬉しそうに笑った夏子は走って蒼より先に自転車に乗りかかった。

ぽこん、と軽く蒼に頭を叩かれたけど夏子は気にせず蒼が自転車に乗りかかるのを待った。

+ 3 幼なじみ2（前書き）

夏のこと好き。だから、離れたくないもん

+ 3 幼なじみ2

+ + +

「蒼は、大学行くの？」

「んー……」

「働くの？」

「んー……」

「東京とかに行っちゃうの？」

「……それは、ない」

右を見れば一面の田。

左を見れば一面の田。

前を見れば蒼の背中。

最後の質問だけきっぱり答えた蒼に夏子はぎゅっと後ろから自転車をこぐ蒼に巻き付いた。

夏子は風でふわふわと揺れる蒼の天然パーマをぐしゃぐしゃにしてやりたい、と言う感覚にとらわれた。

「夏のこと好き。だから、離れたくないもん」

自転車が古びてさびた音をたてる。

そんなにはつきり？好き？なんて言われても……な。

毎日のように言われている言葉をスルーして、夏子は口の中でつぶやいた。

ぼうつとする夏子の目の前にトンボが通り過ぎる。
トン、と蒼の背中に夏子は軽くもたれかかった。

「……夏休み、また、絵、描くの？」
「ん。描くよ。引きこもって描くよー」

頭の中は、あと1ピースでパズルが完成するように絵の構造ができていた。
しかし、何かがない。

「じゃあ、また夏の家……行く」

途切れ途切れ話す蒼の背中を見て、夏子は

眠たいのか。

と鼻でため息。

「眠たいの？」

「ん。……でも、それよりアイス、食べたいなー……」

「そか。じゃあ頑張ってこいで。途中で寝ないでね」

「うんー……」

自信のなさげな返事を聞いて夏子は呆れて小さく笑った。
風でめくれる膝上7センチのスカートを片手で押さえる。

「蒼、もしわたしが画家になったらどうする？」

「んー？……おーえん、する」

「東京に行っちゃったら？」

「……寂しくなって帰ってきた夏子を笑顔で出迎える、よ」

蒼がそう言うと同時に、昔嗅いだことのある太陽の匂いがした。

「さすが。わたしの幼なじみだねえ……」

キコキコと鳴る自転車の音を聞きながら、お寺のように大きい日本
式の和風の家が夏子の視線に入った。

+ 4 村の万屋（前書き）

……眠いなら寝ろ。寝る子は育つって言っけんね

+ 4 村の万屋

「ここは寺か」とつい突っ込みたくなるほど大きい和式の家の中に入る。

「雪ばあー！お菓子買いに来たー」

セミの鳴き声でかき消されないように大声でこの家の主、不頭ふがしら雪ゆきを呼ぶ。

「まあーた夏子と蒼か。……何目当てじゃ？」
「アイス」

無愛想に答えた蒼は半目で、見るからにガツカリしている雪に伝える。

「アイスちょうだい。あと麦茶も」
「ここはお前らのたまり場じゃねえんだぞ。……アイス食ったらとつとと帰れ」
「とりあえず、……アイス……食べたい」

初対面でのこの口の悪さは引くが、産まれる前からの付き合いの夏子と蒼は雪の優しさをよく知っている。

これを、世間でいう？シンデレ？ってやつなんだろうなあ…
…。

「夏、アイス」

「はいはい、待って待ってー」

雪の了解を得て、ガラガラとアイスの入った箱を開ける。
ひんやりとした空気が気持ちよい。

「何しよっかなあー」

「……あ、」

ほぼ半目状態の蒼は口をぽかんと開けて夏子に向かって小さく頭を下げた。

「ごめん、夏。……お金、忘れた。……家、に」

「……はああああ」

長いため息をした夏子は目の前にある垢抜けたボサボサの頭をゴツンと叩いた。

「後で返してよ」

「うん」

小さく微笑んだ蒼は「ありがとう」と付け足してアイス選びに取りかかった。

殴られてるのになんで笑うかな。

「夏子、」

「んー？」

雪に呼ばれた夏子は振り返る。

と同時に雪が麦茶を用意していてくれたことに気が付く。

「新しい絵の具、きたべ」

「えっ。本当？」

「置物の横に置いてあるばい」

たぬきの置物の横を見ると絵の具の入った箱が3つあった。

「これ……すご！全部色が違う……」

「わざわざ取り寄せたばい。丁寧に扱えよ」

「当たり前だっての！」

1パック12色。それが3つ。
しかし3パックともすべて色が違う種類だった。

久々にテンションの上がった夏子はその場でウキウキとしながら絵の具を開ける。

「……駄菓子屋なのに、絵の具、売ってる、……の？」

「誰が駄菓子屋じゃ！ここは万屋、何でも屋。お前らだけじゃ、？
駄菓子屋？扱いしよってからに……」

「そっかー……」

「……眠いなら寝ろ。寝る子は育つって言っけんね」

アイスを食べながら言う蒼に、雪はため息をついて麦茶を飲み込んだ。

+ 5 秘密基地（前書き）

あ。そうだ！昔行っ
た？秘密基地？行こつよ！

+ 5 秘密基地

「とつとと帰れ！こつちば忙しいんだ」と雪に叫ばれしづしづ夏子と蒼はアイスをくわえて外に出た。

「……寝たかった、のに……な」
「じゃ、帰って寝とけ」

フラつきながら、直射日光に弱い蒼は自転車に乗りかかる。

「わたしはちよつと景色見て、良い？画材？が無いかな探しながら帰るから」

「……じゃあ、おれ、も……ついて行くー……」

「眠たくないのか。おのれは」

「夏が、行くなら……おれも、いくの」

しよーがないなあ。

……それに、蒼一人じゃ帰れるか分からないし。

と心の中で付け足して、夏子は「じゃあ行こー！」と張り切って歩き始めた。

「なにか見つければ、夏休み満喫できそうなんだよな……」
「どんなの探してるの……？」

首をかしげて聞いてくる蒼を横目で見て、夏子は「さあ」と答えた。

「描きたいものなんて、その日その日で変わるよ。……こう、ビビーン！ときたのが初めて？作品？になるんだもん」
「へー……」

俺にはよく、分かんない……。や。と小さくつぶやいた蒼は、溶け始めたアイスをまた食べ始めた。

「まあ、……他の画家の人たちはどうかは知らないけど、さ……恥ずかしくなった？」
「うるさいなあー」

図星をつかれた夏子は口をとがらして蒼より3歩先を歩いた。

「あ。そうだ！昔行っただ？秘密基地？行こうよ！」
「あー、あった。ね……」
「あそこだったら蒼も寝れるんじゃない？」
「そう、だね、うん」

はつきり言つとどうでもいい蒼は流れのままに夏子に従つた。

？秘密基地？は、夏子と蒼と他の子供たちで昔作つた場所。
大人は知らない秘密の場所で、よく遊んでいた。

中学に入ってからめつきり行かなくなつた？秘密基地？。
消えて無くなっているのか、それとも昔のままなのか。

少しワクワクとした気持ちで、夏子の足は自然と速くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4181n/>

ミドル恋愛

2010年10月18日15時00分発行